

タガ 日本の箍の緩みの考察

金沢工業大学客員教授

(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

日本文化の基底の形成について

—日本人は、もっと日本文化の拡がりとお興行きを本質的に学び、

日本に自信を持ち、世界と渡りあおう!—

(3) 日本文化の深層の形成の 研究の重要性

■日本文化研究の概要と課題

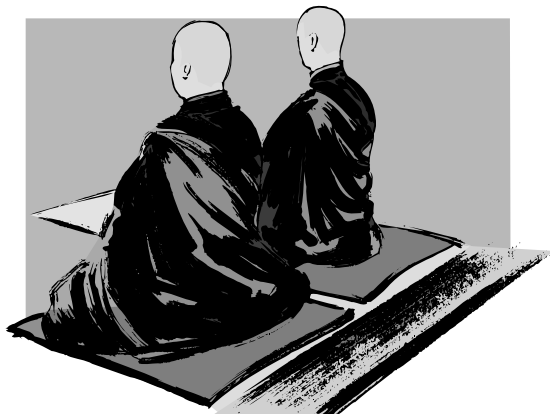
今日日本文化への様々な見直し
が、人々の口に上がり始めている。そ
れは(1)と(2)で見てきた如く、多くの
外国人が日本を「黒船来襲」の如
く、日本人を刺激している事に大き
な要因があるようだ。日本人自身
が、内発的に関心を高めた訳では無
いのは、いつもの事である。しかし何
度目かの日本研究ブームの到来と称
する事が出来るであろう。だが、そ
うした研究において、日本人あるい
は日本社会に關しての基底の部分に
關しての日本人自身の行う研究は、
少しその点に關して弱い部分がある
のではなからうか。

図3に、日本(人)研究の名著の一
部をリストアップしたが、日本(人)
に關しての現象的に目に見える部分
の分析は、各々が鋭く行っているが、

何故そうした個々の事象が生
まれ育つたのかに關しての分析
は弱いのではなからうか。

もち論、そうした基底や深
層に關しての研究が無い訳では
無い。例えば、『日本文化のか
くれた形』の中にも、その試み
は見られるが、私の理解したい
点とは少し離れている。何より
も、そうした基底や深層がど
の様に形成されたのかの分析
が薄いと気がかりである
し、今一つ日本人自身が日本や
日本人について深い理解に至ら
ない理由ではないだろうか。

実は日本研究そのものは、江戸時
代辺りから、実に多くなされてい
るので、ひよつとする我々が知らない
のみで、大変な研究が埋もれている
かも知れない。多くの人が過去の研
究をレビューして、新たな論点を
加えていく作業を繰り返していく中
で、深味を増していく部分と、逆に



落とされていく部分が在るのも事実
であり、そうした中に基底や深層に
ついての卓越した研究があつたのか
も知れない。

それを理解した上で、ここでもう
一度日本人が日本の歴史を通して日
本の中に築いてきた文化の基底、深
層の形成プロセスについて再度論じ
ることをここでの課題としてみたい。

題名	1 『禅と日本文化』	2 『茶の本』	3 『「縮み」思考の日本人』
著書	鈴木 大地	岡倉 天心	李御寧
内容	日本の文化に低在する禅の教え	茶の本質的理解	入れ子型 扇子型 姉妹人形型 折詰弁当型 能面型 紋章型
題名	4 『「甘え」の構造』	5 『日本の思考』	6 『菊と刀』
著書	土居 健郎	丸山 眞男	ルース・ベネディクト
内容	受信的愛情希求	現代日本の思想が当面する問題への考察	日本占領の為の日本研究
題名	7 『大日本史』	8 『歌意考』『万葉考』『国意考』	9 『村農場の研究』
著書	徳川 光圀	加茂 真淵	樋口 貞三
内容	大日本史の編纂 (本紀73巻、列伝170巻、その他合せて398巻)	和歌における古風の尊重、 万葉主義を主張して和歌の革新	米価体系の変容と稲作新構造
題名	10 『武士道』	11 『「いき」の構造』	12 『風土』
著書	新渡戸 稲造	丸鬼 周蔵	和辻 哲朗
内容	武士は何を学び、どう己を磨いたか 日本人の精神	日本独自の美意識を減少額的に把握	和を持って

図3 日本人の精神に関する研究の著者と著書

<p>○競争的な集団主義 (Competitive groupism)</p> <p>○現世主義 (This-worldliness)</p> <p>○国民的健忘症 (現在を尊び、 昔の事を心配しない)</p> <p>○集団内部の調整装置としての 象徴の体系</p>

■日本文化の基底、深層に関する研究

『日本文化のかくれた形』において武田清子監修の下に、加藤周一、木下順三、丸山眞男の三氏の日本文化の「アーキタイプス」に関しての見解が表明されている。加藤周一氏は次の四点をその中心となす論を展開している。そして、この四つの内的連関性を持つ日本人の特質が対外的にどう発露するのかを論じている。しかし、私が問題とするのは、何故そうなったのかの歴史的形成過程である。それに関しても『日本人はどこから来たのか』(斉藤忠著)を始め、参考になる文献は多く、客観的記述は参考になるが、それらがどうして形成されたのかの視点は少し突込みが足りないように思えるのである。それはどうしてなのだろうか。

■日本(人)の文明、文化の深層(基底)の形成を考えるに当たって

「静けさや岩にしみ入るセミの声」、「古池や蛙飛び込む水の音」といった、日本の誇る「五・七・五」の俳句の中にうたわれている心をどのような捉えるのかの研究は多くあるが、そこにうたわれている心が何故日本人の中に生まれ、身に付いたのかの研究に関しては十分に研究されているようにも思えるが、今一つもの足りなさを感じるのは私のみであろうか。

例えば、岩という無機静寂な存在に、永遠不動の姿を見て、その永遠不動の固い岩の中に、僅か1〜2週間の一瞬の生命の輝きしか持たない蟬をその生命の輝きの象徴としての蟬の鳴き声に対比させ、しみ入るという表現により、一瞬の生命と永遠の関係を見ているが、それは日本の活花の技法へとも繋がっていく。そしてその更に奥にあるのは無常観であり、善の教えでもある(『禅と日本文化』)。何故そうした心理描写を「五・七・五」の形式の中にするようになったのであろうか? 今日「五・七・五」の形式の中で表現されたもの

についての分析は多くなされ、立派な業績も多いが、なぜ日本文化として、そうしたものが育ったのかに關しての研究は、まだ十分とは言えないのである。

何よりも、どの民族の人々も、自らの与えられた生存環境に適應するべく自らの心身を変化せしめると共に、環境そのものを変化せしめて、その適應を図ってきた。まさに物理的空間と意識空間としての心をどう対応させ、より良い生存をデザインするかの歴史の中で、人間の認識は深まってきたのである。日本人の培ってきた認識空間は、まさに日本の物理的自然の深層を反映したもののなのである。この点の理解が日本人の文化の深層（基底）を説明していく上でのベースなのである。

図4に、日本文明、文化の深層（基底）、あるいはプロトタイプをどう捉えるかを示した。

一番ベースには、人間の一般の認識のベースとなる「存在―關係―變化」の三位一体に対し、日本人が取り込んだ概念は、存在に対し「無有と悉皆仏と不殺生」であり、次いで關係においては「念三千、一即多、



間」である。そして変化においては、「無常觀 緣起 千變万化」と集約出来ることを示してある。

既に図4の上部で示した日本文化を示すキーワードは、「存在―關係―變化」を示す具体的な言葉として今まで多くの人に取上げられてきている。前述の本でも、それ以外でも数多くの日本（人）論が上梓されており、その中で解説が加えられている。それらを紐解けば、それらに關しての説明が与えられるであろう。

私がここで問題にしたい事は、繰り返すが、前述の『日本文化のかくれた形』の中で、日本の代表的な事

として明らかにされている如き内容が、どうして日本社会に形成されたのかに關してである。

李御寧氏の『縮み』志向の日本人』にしても、浜口恵俊氏の『間人主義』にしても、それらのキーワードは、日本（人）論の多くの内容を通底する、あるいは焼き鳥の串の如き役割りを立派に果たしてくれている。

しかし、そうしたキーワードそのものが、日本社会の歴史の中でどのように形成されたかに關しては余り体系的な記述をしたものは見当たらないのである。日本にどのようにして稲作農業が入ってきた、それが日本人の生活をどのように展開したかに關しての記述は詳しいが、それらがどの様に日本文化の特質を形成してきたのかに關しての構造的、体系的分析はどれも弱いのが今までの日本（人）論ではなかっただろうか？

それを次回以降で述べていく事にしたいと思う。

図4には、日本文明、文化の深層（基底）、あるいはプロトタイプをどう捉えるかを示した。

一番ベースには、人間の一般の認識

のベースとなる「存在―關係―變化」の三位一体に対し、日本人が取り込んだ概念は、存在に対し「無有と悉皆仏と不殺生」であり、次いで關係においては「念三千、一即多、間」である。そして変化においては、「無常觀 緣起 千變万化」と集約出来る。

既に図4の丈夫で示した日本文化を示すキーワードは、「存在―關係―變化」を示す具体的な言葉として今までも多くの人に取上げられてきている。前述の本でも、それ以外でも数多くの日本（人）論が上梓されており、その中で解説が加えられている。それらを紐解けば、それらに關しての説明が与えられるであろう。

私がここで問題にしたい事は、前述の『日本文化のかくれた形』の中で、日本の代表的な事、「間人」が明らかにされている如き内容が、どうして日本社会に形成されたのかに關してである。

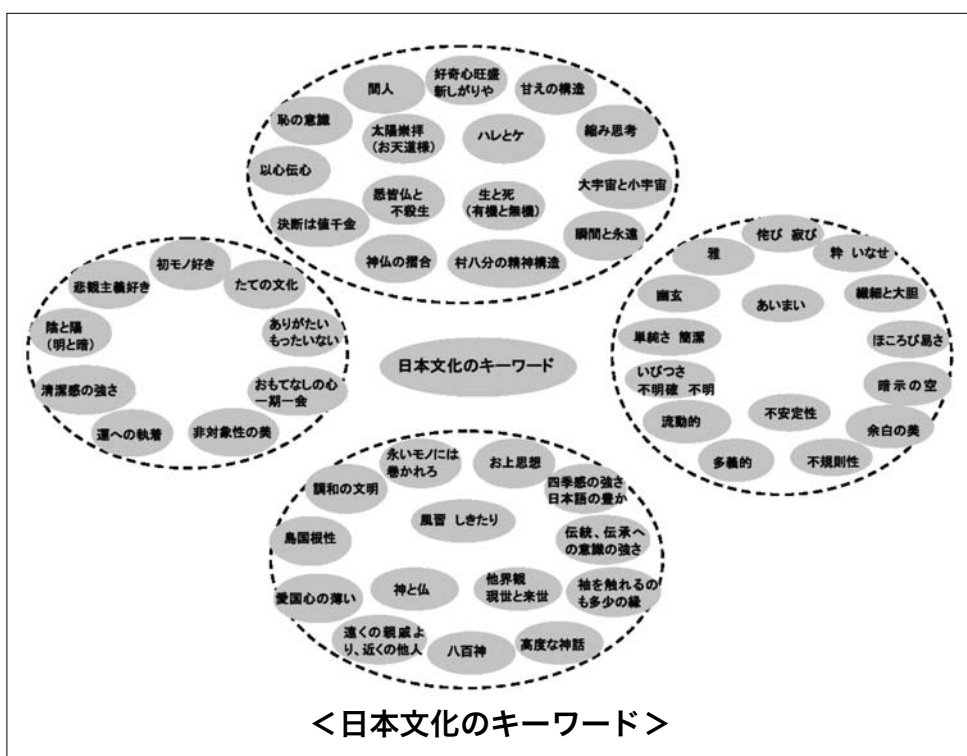
李御寧の『縮み』志向の日本人』にしても、浜口恵俊の『間人主義』にしても、それらのキーワードは、日本（人）論の多くの内容を通底す

る、あるいは焼き鳥の串の如き役割
りを立派に果たしてくれている。
しかし、そうしたキーワードその
ものが、日本社会の歴史の中でどの

ように形成されたかに関しては余り
体系的な記述をしたものは見当た
らないのである。日本にどのような
して稲作農業が入ってき、それが日

本人の生活をどのように展開したか
についての記述は詳しいが、それら
どの様に日本文化の特質を形成して
きたのかについての構造的、体系的

分析はどうも弱いのが今までの日本
(人)論ではなかったのだろうか。
それ次回以降で述べていく事にし
たいと思う。



- アジア大陸の東の海に浮かぶ島国(蓬莱島)
- 亜寒帯から亜熱帯の気象
- 温帯モンスーン (年間降雨量 1800mm)
- 国土の 2/3 は山
- 国土の真ん中にアルプス山脈
- 四季の明確性 (ほぼ3ヶ月毎)
- 火山国であり、地震の多い国
- 海岸線が長く、海洋生物種の 35%が生棲
- etc.
- 日本人の生活構築 一閑人主義と句と節句一
- 環境の淘汰圧への適応
- 水田稲作農業 一村としての共同作業 一定住一
- 山間の山里の運命共同体としての村落共同体 一村八分一
- 複雑な自然の反映としての日本人の心情の複雑さ
- 日本語の特色 一主語が無い(いらぬ)一
- 開かれた文化と閉じられた社会
- etc..

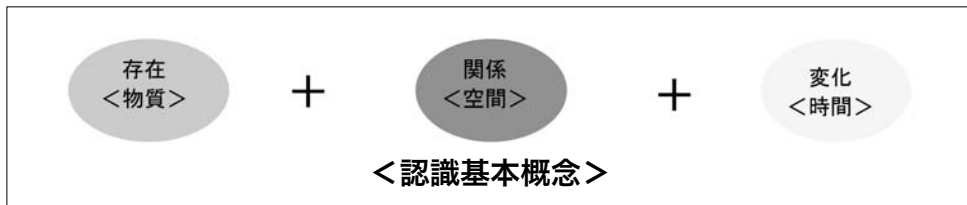
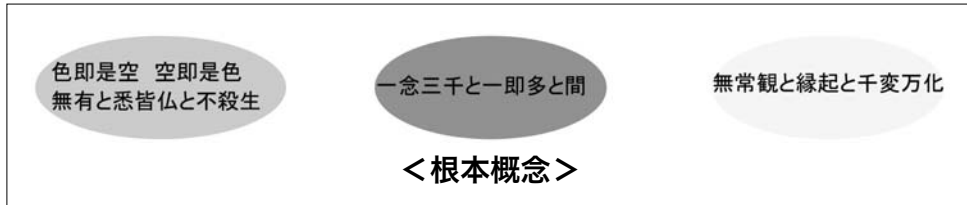


図4 日本の文明、文化の深層(基底)をどう捉えるか?